

「卓越したジェネラリスト診療」入門

複雑困難な時代を生き抜く臨床医のメソッド



評者 酒井 郁子 千葉大大学院教授・高度実践看護学／専門職連携教育研究センター長

◆魔法の書でも奥義の巻でも自己啓発本でもない

本書は、家庭医としての藤沼康樹氏（医療福祉生協連家庭医療学開発センター長）が、これまでの自身のジェネラリストとしての実践知を、多様な領域の大理論や概念モデルと照らし合わせ解説し、今後の発展の方向性を論述したものである。

第I章「プライマリ・ケア外来の一般要件」は、家庭医としての実践を始めたばかりの方へのパール集となっており、独り立ちする際に「ここは気をつけよう」と先輩としてアドバイスするような内容となっている。第II章「卓越したジェネラリスト診療の実践」では、既存の大理論や概念モデルについて基礎知識の整理を行い、かつ「医師らしく」考えるその方法は「診断推論」だけではなく、患者を理解していくにはいろいろな見方があるということを、豊富な事例を基に解説している。特にこの章の4～8節は、看護学領域でのパトリシア・ベナーの著書『From Novice to Expert』をほうふつとさせる内容でエキスパートになっていく（卓越していく）ときのものの見方・考え方が具体的に論述されている。第III章「卓越性を支える『チーム』と『教育』」では、多職種連携教育の3つのメリット「チームスキルの獲得」「共同学習の方法の獲得」「省察と経験学習の方法の獲得」のうち共同学習・省察・経験学習について考察している。専門職連携教育は、チームビルディングなどのチームスキルの獲得のみに焦点が当てられがちだが、実は、チームを俯瞰し、どんなチームであってもその職種の役割を果たし、かつ他の職種の役割発揮を支援する「共同学習」「省察」「経験学習」のスキル

が必要である。家庭医として、というか、臨床家として、全ての職種が長く活動するために必須のコンピテンシーであると思う。

終章「おわりに」が秀逸だと思う。医師が保有しがちなシニカルな態度（すみません…）を封印し、自己と他者の人生を肯定し、希望を持ちながら、できることをやっていく、という宣言として読んだ。これから高齢の医療専門職も増えていくのだが、この「おわりに」は大ベテランとなった専門職が、これからの仕事人生を生きていくときの灯台になるような文章だと思う。

最後に、看護職の皆さんが本書を読むと、特に第II章あたりで、「だから、今まで看護はそうやってきたじゃん！」「人生の意味とか価値とか、病みの軌跡とか、病気を治すだけが医療じゃないってやってきたのに、医師は全然聞いてくれなかったじゃないか！」という気持ちが湧く人も一定数おられると思う。共感するとともに、これまでの対立の歴史が頭に浮かぶというか……。でも冷静に考えてみると、看護師だって、特定行為研修で医師の診断推論などを学び、医師の知識やスキル、考え方を共有した上で看護することにより、患者さんへの看護実践に幅が出る。そして、それをよく思わない医師も確かに一定数いる。つまり、令和の今は、いろいろな職種が他の職種の保有する知識とスキルを共有することが実現しつつあるということであって、とある専門職集団が、とある知識体系を独占することに何の意味があるのか、ということを考えるきっかけにもなると思う。

藤沼 康樹 著

A5/296頁/2024年/定価4,400円（本体4,000円＋税10%）/ISBN978-4-260-05354-9/医学書院刊